

怪 蒐

[kaishu]

Presented by Saku Itose

糸世朔



目次

第一話	十三階段	5
第二話	忌み地	43
第三話	凶宅	100
第四話	呪詛箱	126
第五話	肉人さん	160
第六話	悪夢	213
最終話	触穢	265

第一話 十三階段

1

階段を上るだけで一万円もらえるというアルバイトを、学部が同じというだけで一度も話したことがとすらない三ツ橋みつはしに紹介された時。

間宮まみやは、あまりにも怪しすぎると思った。

三ツ橋がやたら交友関係が広いことを知っていた。大学構内で見かけるたびに違う集団とつるんでいるし、講義もバイトだかイベントだかでしょっちゅういない。どの集団でも中心にいる彼は、地味で友達のいない間宮とはまったく別世界の住人である。大衆に埋没まいぼつしながら生きている自分にとっては、そもそも近寄りがたい存在でもあった。

そんな彼が、どうして自分なんかに声をかけたのか。謎すぎるアルバイトの内容もさることながら、そっちのほうに気がなった。

間宮のあからさまに不審げな視線にも三ツ橋はまったくめげず、「とりあえず話だけでも聞きに来なよ」と講義後、半ば強引に大学から連れ出されたのだった。

——そして今に至る。

現在、そのバイト先の事務所に向かう道中である。

電車の吊り革につかまりながら、間宮は隣に立つ三ツ橋にちらと目を馳せた。ワックスで立たせた明るめのアッシュレッドに染めた髪に、ブルーバティック柄のシャツ。派手である。だが下品には見えず、良い品なのだろうと思われた。スニーカーも高そうだった。

自分のすれた靴先に視線を落としたまま相槌すらろくに打たない間宮に、三ツ橋は中身の無い話を延々と、しかもいかにも楽しそうにしゃべり続けていた。そのコミュニケーション能力とメンタルの強さは慄くばかりだ。これがいつでも人に囲まれているゆえんなのだろう。

「……気を遣って話さなくてもいいよ。沈黙、別に平気だから」

三ツ橋はびたりと口を閉ざすと、面食らったように振り返った。

間宮は視線を靴先に戻し、君が好きでしゃべってるならいいけどとぼそりと付け加える。

それから無言になってしまった。

実際、気を遣わせていたようだった。

電車を降り、池袋駅の東口を出てしばらく歩くと、周辺にはオフィス街が広がっていた。

まわりはサラリーマンばかりである。そんな中を三ツ橋は慣れた足取りで進んでゆく。

やがてありふれたテナントビルの前に着いた。一見つるりとしていてきれいだが、古そうな建物

だった。

三ツ橋についてエントランスに入り、そのままエレベーターに乗った。

——色がない。

それが事務所の第一印象だった。

壁も床も天井も真っ白なただっ広い空間に、真っ黒な応接セット——向かい合う黒レザーのソファァーに黒脚ガラステーブル——がぼつんと設えられている。まわりの白さと対比してそこだけ闇が覗いているように見えた。家具はそれだけである。

三ツ橋は「どうもー」と愛想よく声を掛けてずかずかと足を踏み入れた。モノトーンの背景に髪も服も派手な男が入りこむさまは、まるで異物が混入したように見えた。

少しの間の後、奥のドアから現れたのは、おそらく三十代半ばであろうと思われる顔色の悪い男だった。

男も色味がなかった。黒スーツを身にまとい、ゆるく波うつ髪も黒い。病んでいるかの如くに目に光がなく、無表情で、なんだか不気味な印象だった。

男はつかつかと近づいてくると、間宮の真ん前に立った。

対比する家具が少ないせいかなんだか遠近感がよくわからなくなっていたが、近くで見ると長身なのがわかる。

「間宮です」

おずおずと会釈をすると、男はじっと見下ろしてきた。ふうんと目を細める。

「そうか。君が間宮くんか」

異様に低い声だった。なんだか怖い。

男はイスルギだと名乗り、ふいっと目をそらした。怖いだけでなく——かなり感じが悪い。

「あの、アルバイトの面接にお伺いしたんですが……」

ああそうだった、とイスルギは応接ソファアを顎で示した。

「掛けたまえ」

その横柄な態度に、間宮は絶句する。どうしてこっちが話を進めなきゃならないんだと思いがらも革のソファアに腰を下ろすと、三ツ橋も隣に座った。

イスルギは一度奥の部屋に引込むと、バインダーファイル——これまた黒の——を手に戻ってきた。そして正面のソファアに座り、間宮を見据えた。

「まずは仕事に関することは全て秘密厳守だ。できるかな？」

口調の丁寧さとは裏腹に、なんだか圧がすごい。間宮は居心地の悪さを感じながらも「はい」と頷く。「よろしい。一番の条件は口が堅いことだ。あとは——」

体力があること、と言いながらイスルギは立ち上がった。テーブル越しに手を伸ばし、いきなり間宮の腕をつかむ。

「細身だが、重いものは持てるのかな？」

間宮はぎよつとし、とつさにその手を振り払った。

「初対面の人、触るもんじゃないっすよ」

三ツ橋が苦笑気味に言った。イスルギは「そうなのか？」と納得できないように眉をひそめる。変な人だ。——直感で察した。この仕事、断ったほうが良いと。

「重いものは持てません。体力もないです。あの、申し訳ないんですがやつぱり——」

「だが正直だ。採用」

イスルギは間宮の言葉を切り捨てるように言う。

「ちよつと待ってください、僕——」

「いやあ、助かったよ。いい子を見つけてくれて」

イスルギは三ツ橋に向き直った。約束の紹介料だ——そう言いながらジャケットの内ポケットから高価そうな財布を出し、万札を五枚抜いて三ツ橋に渡す。

間宮は呆気にとられた。こっちの報酬は一万円なのに、ただ紹介しただけの三ツ橋が五万円とはどういうわけなのだ。

「三ツ橋くん。君はもういいよ。また連絡する」

三ツ橋は「まいど」と猫のように目を細めて笑うと、ソファアから立ち上がった。

「じゃあな、間宮。詳しいことはイスルギさんに聞いて」

「ちよつと待てよ、三ツ橋——」

腰を上げかけた間宮に、イスルギは「座りたまえ」と低く言った。

その隙に三ツ橋はガラスドアから出て行ってしまった。

(置いていかれた)

取り残され、間宮は呆然とした。

この薄気味悪い男と二人きり――。

額にじわりと汗が滲む。心中で警鐘が鳴っている。

――何とかして断らなければ。

どう切り出そうか言葉を探していると、イスルギがおもむろにソファから立ち上がった。入り口のガラスドアに向かい、サムターンを回して内側から鍵を閉める。

「なんで鍵を……!」

「話を邪魔されるのが大嫌いなんだ」

イスルギは壁の埋め込み型ボックスを開けてスイッチを押した。電動シャッターが音を立てて下りてゆく。

(話して……何をやる気だ)

間宮は凍りついた。

「なにも取って食いやしないよ。面接の続きをするだけだ。――だがこれからの話は、君にとってあまり人に聞かれたくないであろう内容だからね」

イスルギは戻ってくると、応接ソファに腰を掛けた。バインダーファイルを開く。

「ご両親は他界されているそうだね」

唐突に問われ、間宮は驚いて顔を上げた。

「どうしてそのことを……」

イスルギは「三ツ橋くんに聞いてね」と言い、バインダーファイルから目を上げた。

「ところで――君が一家惨殺事件の生き残りというのは本当かね？」

間宮はわずかに震えると、膝に置いた拳をぐっと握りしめた。

人に聞かれたくないであろう話とは、このことか。

「……それも三ツ橋に聞いたんですか？」

「いや、彼はそこまでは知らないようだったよ。君のことは事前に少しこっちで調査させてもらった」

(調査して……)

言葉も出せずにいる間宮を、イスルギはじっと見つめた。

「――で、事実なのかい」

天涯孤独であることを、念を押して確認するような訊き方だった。

「はい。……僕は死に損ないです」

そうか、と頷いたイスルギはなぜか満足げに見えた。

間宮は奥歯を食いしばる。一体何なんだ。人の過去を暴き立てて。この質問がアルバイトと何の関係があるのだ。

そこでふと、違和感に襲われた。――身寄りがいない方が、都合がいい仕事なのか？

「では親兄弟親類は皆無なんだな？ ……いや、叔父さんがいるじゃないか」

イスルギはバインダーファイルに挟まれた紙をべらりとめくり上げ、「三ツ橋くんもいいかげん

だな」と眉根を寄せた。まるで舌打ちでもしそうな顔である。

「しかも同居しているのか……。ご両親が亡くなった後に引き取られたのかね？」

「いえ……。児童養護施設を卒業後に」

なるほどな、とイスルギはファイルに視線を落としたまま顎を擦った。

(……なぜそんなことを聞く?)

間宮はごくりと生唾なまつばを飲む。

「……それが、今回のバイトに関係があるんですか？」

「いやちよつと確認しただけだ」

イスルギはぱたんとファイルを閉じた。

「まあいいだろう。——ところで仕事の内容は三ツ橋くんに聞いているかな？」

「……階段を上るだけで一万円もらえると」

「その通りだよ」

イスルギはソファーにもたれ、鷹揚たうように足を組んだ。

「君の階段を上る体験を買いたいんだ。本当は十倍出してもいいくらいだが。あまり報酬が高すぎるとほら、怪しいだろう」

すでにじゅうぶん**に**怪しい。警戒もあらわな間宮をよそに、イスルギは自らのジャケットの内側に手を滑り込ませた。

「ただ一つ条件があつて——仕事の際にはこれをつけてもらいたい」

内ポケットから引き出されたものに、間宮は眉をひそめる。

「……腕時計ですか？」

「腕時計型測定装置だ。高機能なスマートウォッチのようなものだ。あれには時計や通話機能の他に健康管理機能があるだろう。心拍数、睡眠時間、運動時間等を記録することができる。だがこれは——」

イスルギは測定装置をガラステーブルに置くと、間宮に目を向けた。

「血流動態けつりゅうどうたい反応を測定する。つまり体験を記録することができるんだ」

間宮は黙もくした。——何がつまりなのか。さっぱり意味がわからなかった。

「……えっと、血流で？」

「血流じゃない。血流動態反応だ」

イスルギは苛立ちもあらわに言う。まるで責めるような口調である。

「バイタルサインと感情を結び付けようとする試みは古くから研究されているんだよ。例えば嘘発見器ホリグッラフがそうだ。ポリグラフはアメリカの警察官ジョン・ラーソンが一九二一年に発明したと言われているが、それより前の十九世紀末にはすでにイタリアで犯罪者の血圧を測定するための専用の手袋が使用されていたと伝えられている。昔から実用されており、歴史あるものだ」

はあ、と間宮は困惑の声を漏らす。

「血流から感情を読み取るうとする試みが昔から行われてきたことはわかりました」

血流じゃない血流動態反応だ、とイスルギは不機嫌そうに繰り返した。

「でも、体験を記録するんですよね？ ならビデオカメラでいいんじゃないですか？」
「——ところで君はfMRIを知っているかね？」

(は?)

唐突に話が飛び、間宮は目を瞬いた。

イスルギは間宮の返答を待たずして続ける。

「日本語では機能的磁気共鳴画像法といってね。人間の脳活動を測定し、視覚化するものだ。つまり人の視覚情報を取り出し、デジタルイメージで再現することができる」

「ぼかんとする間宮に、イスルギは「それだけじゃない」とバインダーファイルの角を間宮の眼前に突きつけた。」

「実際に見たものだけでなく、心の中でイメージした内容——脳内だけの存在しない映像を再現することも可能だ。つまり、夢や妄想、幻覚などの映像化だ。要するに人間の脳内の映像を再現して、他の人も見られるようにできるんだ。——この技術を脳情報読解技術という」

「……SFの話ですか？」

「フィクションではない。米カリフォルニア大学の科学者らが二〇一一年にfMRIを使って視覚情報の映像化に成功したのを先駆けに、脳内イメージの再現は現在までに飛躍的な進化を遂げているんだ。現在この分野は日本が世界をリードしていてな。二〇二三年大阪大学では脳活動から写真と見紛うほど高精細な画像を復元することに成功し、二〇二五年にはNITの研究機関が脳内のイメージをリアルタイムに文章化する技術を発表している。単なる視覚情報の再現を超え、脳が捉え

た意味や文脈の解説にまで到達しているんだ。君の言うかつてのSFは、今や現実のものとなっているのだよ」

男は濃みなくほほ息もつかずに語った。しかも早口である。

「ただ——現時点の技術ではこれが限界だ。そこでだ」

イスルギはガラステーブルの上の測定装置を、間宮の前にずいっと押し出した。

「これは弊社が開発したfMRI……いやそれをはるかに凌駕する測定装置だ。手首から血流動態反応——つまり人間の脳活動を測り、脳内データを記録する。視覚聴覚だけでなく味覚嗅覚、指先の皮膚感覚、筋肉の収縮、心臓の拍動までも。情動についても同様だ。ヒトの複雑で繊細な感情を、ホルモンバランスの変動ごとにな」

ビデオカメラなど足元にも及ばないだろう、とイスルギは目を細めた。

「……えっと、つまりバーチャルリアリティのような」

「あんな玩具と一緒にしないでほしい」

軽蔑した目を向けられ、間宮は思わず黙り込む。その一見腕時計にしか見えない物に視線を落とし、いぶかしげに視線をあげた。

「……人の体験なんて、一体何に使うんですか？」

「売るんだよ、とイスルギは言った。」

「我々は富裕層向けの会員制サービスを提供している企業でな。事業のひとつとして体験を商品として売っている。命の危険なくスリリングな体験をしたい、家庭の暖かみを味わいたい、性的な快

楽を得たい——また異性になってみたい、子供に戻りたいといった今世では決して叶わぬ欲望も、この測定装置で記録した個人の体験データを利用して、本人に成り代わったようなリアルな疑似体験を楽しむことができる。まるで、意識を、憑依させた、とくにだ。もし君のデータを使ったなら、高齢者でも女性でも、障害を持っていても、健康な二十歳の青年の人生の一時をそのまま追体験できるといわけだ。そうでなくとも世の中には時間をとれなかったり、社会的立場を考慮したりなどの理由から、やりたいことを自由にできない人がたくさんいるのだよ。すべての人間が大学生のように身軽な存在ではないからな」

さりげに中傷され、間宮はむっと眉をひそめた。

「でも……階段を上るんですよね？ そんな体験に必要ななんてあるとは思えないんですけど」

「まさかそこらの階段を上って終わりだとも思っているのかね？」

真顔で切り返され、間宮は言葉を途切れさせた。

「……ただの階段じゃないんですか？」

「誰がそんなことを言った？」

そうだひとつ言い忘れていたな——と、イスルギは脚を組み替えた。

「弊社は顧客のニーズに合わせて様々な種類の体験を蒐集しているわけだが——私が担当している分野は『怪』に関する体験だ」

「怪……？」

イスルギは頷いてみせると、おもむろに間宮の手を取った。測定装置を握らせる。

「この測定装置は、外しているときは何も記録しない。だから持っただけでも仕事時間以外の私生活は覗けない仕様になっているから安心したまえ。では明日の一時に君の家にタクシーを向かわせるから」

「待ってください、まだ受けるとは……」

金が欲しいんだろう——イスルギは間宮を見据えた。

「階段を一階分上るだけで一万円だ。こんな美味しい話を蹴るのかね？」

間宮は思わず黙り込む。

それにしても——怪に関する体験って何だ。詳細を聞けば聞くほど胡散臭さが増すのはどういうことなのだ。

「不安そうな顔だなあ。なあに、ちょっと怖いことを体験するだけの簡単なお仕事だよ」

イスルギはうつすらと笑った。

怪しげなネット広告のような言い回しである。

それと、とイスルギは立ち上がりしなに間宮を見下ろした。

「迎えに行くのは昼の一時じゃない。深夜一時だから間違えないようにな」

コンビニエンスストアの白々とした明かりを背に、間宮は迎えのタクシーを待っていた。冷え冷えとした夜気に、長袖のネルシャツの腕をさする。季節はもう五月を数えていたが、夜はまだまだ肌寒かった。

(上着を着てくればよかったな)

迎えの場所に自宅から少し離れたコンビニを指定したのは、なんとなく家に来てほしくなかったからだ。

間宮はスマートフォンをポケットから出し、時計表示を確認する。

(……そろそろ一時か)

小さく息を吐き、夜空を見上げる。雲一つない空に満月が出ていた。

——私が担当している分野は『怪』に関する体験だ。

イスルギの言葉が脳裏をよぎる。

その怪体験なるものと階段を上るという行為が結びつかなくて、間宮は帰宅してからもずっともやもやしていたのだった。

一体何をやらされるのか。

濃紺の空にぼっかりと浮かぶ柔らかなクリーム色の円をぼうつと眺めていると、眼前の路肩に黒のタクシーがすつと止まった。スマートフォンの時計表示は一時びったりを示していた。

後部座席のドアが音もなく開く。間宮が乗り込もうとすると、塗りつぶしたような双眼と目が合った。

「やあこんばんは」

奥の席に、イスルギが座っていた。

「……こんばんは」

間宮は面食らった。イスルギは直接現場に向かうのだろうと思っていたのだ。

「路駐は迷惑になるから早く乗りたまえ」

イスルギは早口で淡々と言う。

(迷惑も何も、車も人も全然いないじゃないか)

言われるがままにイスルギの隣に座ると、タクシーのドアはすぐに閉まった。なぜだか退路を塞がれた気がして、言いようのない不安が込み上げた。

「……あの、今からどこに向かうんですか？」

イスルギは低く呟くようにその場所を告げた。都内の、誰でも知っているような地名だった。だが車でもここから一時間はかかる距離である。

わざわざそんなところまで行って階段を上るんですか——そう問おうとした時、タクシーが低い

エンジン音を響かせて出発した。

間宮は思わず口を閉ざす。運転手が前を向いたままほぼ身じろぎせず、終始無言のものなんだか怖かった。

「ところで——君は十三階段を知ってるかな？」

イスルギは相変わらずな調子で唐突に言った。

「……小学校とかの怪談話ですよね。夜中に忘れ物を取りに行くと、十二段だったはずの階段が十三段になるとか」

「そう。怪異が起こる恐怖の階段だ。幾つものバリエーションがあつてね。その十三段目を踏むと行方不明になる、死ぬ、得体の知れない人ならざるものが現れる、またそれに襲われる、また攫われる。十三段目の天井から首吊り用のロープが下がっているというパターンもある」

はあ、と間宮は相槌をうつ。

「元々、十三階段というのは絞首台の異称だ。ポツダム宣言後の極東国際軍事裁判——いわゆる東京裁判での処刑台の段数からきたものだと言われているよ。ちなみにキリスト教文化では十三という数は不吉と考えられている。いわゆる忌み数というやつだな。キリストの処刑された日が十三日の金曜日であることは日本でも有名だろう。また、サタンが十三番目の天使であるとされていたり、イエスを裏切ったユダが最後の晩餐で着いたとされているのが十三番の席だと言われている——しかも面白いのが、これらはすべて俗説で、聖書にはつきりとした記述はないそうさ。そういう様々な要因を小学校の怪談は取り込んでいったわけだな」

イスルギの抑揚のない低い声で話されると、何でもない蘊蓄もなんだか怖く聞こえた。イスルギ自体が不気味な雰囲気醸しているからかもしれない。

「さらに面白いのが、この十三階段が学校だけに限らず病院やマンションなどといった他の建築物にも派生しているということだ。しかし舞台が学校から離れただけで、同じ現象でも怪談でなく都市伝説と言ったほうがしっくりくるな」

「……今から僕が上らされる階段が、その十三階段ってことですか」

鋭いじゃないかとイスルギは言った。

そんなの、話の流れで誰だって気付く。なんだか小馬鹿にされたようで間宮はむっとした。

「まさに十三階段の噂がある廃ビルがあるんだ。そこで『怪奇現象が起こると言われているビルを散策する体験』と『恐怖する感情』を記録する」

「お金を払ってまで恐ろしい体験をしたい人がいるなんて、僕にはいまいち理解できないのですけど……。かなりニッチな需要なんじゃないですか？」

イスルギは眉をひそめた。

「何を言っているんだね。心霊スポット巡りは娯楽としてはかなり人気が高いんだ。——君は、人はなぜ身の毛もよだつホラー映画や小説、ゲームをやったがるのか考えたことがあるか？ ちよつとした物音にびくつきながら、照明もテレビもつけっぱなしで眠れぬ夜を過ごし、もう二度とホラー映画は観ないと心に誓いながらもついまた観てしまう。よくあるだろう」

僕はないですとの言葉を無視して、イスルギは続けた。

「ホラーには依存性があるんだ。それには明確な理由があつてな、脳の恐怖の処理を司る扁桃体と快感の処理を担う側坐核は同じ大脳辺縁系に坐し、互いに強い連携を持っている。人間は実際の危険は何もなしに恐怖を味わうことに快感を覚えているというわけだ。ちなみにアメリカのホラー映画やホラー番組への支出は一年間に六十五億ドルにもなるそうだよ。約一兆円規模だ」
怖さは金になるのだとイスルギは言った。

「でも僕は大人だし……廃墟なんかに行ったってそんなに怖がれないと思うんですけど」

「心配しなくてもいい。そこはちやんと怖い場所だから」

いぶかしげに見上げた間宮を、イスルギは斜に見返した。

「そのビルはな、噂だけでなく実際に行方不明者が何人も出ているんだ。もともとは平成初期に建てられたテナントビルなんだが、深夜まで残っていた社員や夜勤の警備員などの不可解な失踪が後を絶たなかったそうさ。現在は事務所や店舗もすべて撤退し、廃ビルとなっているが、その後も不法侵入した浮浪者がよく消えるらしい」

（実際に、人が消えている……？）

いきなりぞつとした。夜のビル内で人が失踪する何かが起こっていることは確かなのだ。原因が心霊的な何かであってもなくても、危険なのではないだろうか。

「そんな不安そうな顔をすることはない。怪奇現象などというものはそう狙って起こりなどはしないものだ。むしろ我々にとっては、実際に怪異が起こるか起こらないかはあまり重要ではない。君自身の感じる恐怖を求めているのだからな」

そつと言い聞かせるような声音だった。

「まあ実際に怪異が起こって君が神隠しにあつたりすれば、その経験の値は天井知らずにつり上がるだろうが——そううまくはいかないだろうね」

イスルギは微かに笑うと、車窓の闇に目を向けた。

タクシーは駅前のさびれたシャッター街を過ぎ、大通りを裏に回って古びた雑居ビルが立ち並ぶ細道に入ってしまった。

いかにも何か出そうな雰囲気のある廃ビルの前で、間宮とイスルギはタクシーを降りた。

「これがそのビルだ。閉鎖後は買い手もつかず、そのまま廃墟のようになってる」

間宮はスマートフォンを確認した。時刻はもうすぐ二時になるところだった。

「古来、丑三つ時は不吉な時間帯と認識されているが、行方不明者の失踪時間もその時間帯に集中しているそうだよ。面白いだろう」

実際に人が失踪しているというのに何が面白いのだろうか。

不謹慎さに呆れかえる間宮を尻目に、イスルギは「さあ行こうか」と歩き出した。黒スーツが闇に溶け込んでいくように見える。

「……勝手に入ったら、不法侵入になりませんか？」

「無断で入るわけがないだろう。ビルのオーナーに話をつけてある。鍵も管理会社を通してちゃんと借りているよ。当社を無節操な動画共有サイトの軽犯罪配信者と一緒にしなくていいか」

軽蔑した目を向けられ、間宮は黙する。

それにしても、イスルギの自分に対する態度が短期間で無遠慮になっている気がしないでもないのだが、気のせいだろうか。

「では測定装置をつけなさい」

ビルのドアの前に着くなり、イスルギは言った。

間宮はズボンのポケットからそれを取り出す。どう見ても腕時計にしか見えないそれを手首に巻きつけた。

裏蓋が皮膚に触れた瞬間、ひやりとした感覚に鳥肌が立った。金属の冷たさだけじゃない。妙に吸い付くような感覚がしたのだ。——こんなもので本当に脳の活動を感知できるのだろうか。

間宮が測定装置をつけている横で、イスルギは薄い手袋を両手にはめていた。その手でスラックスのポケットから鍵を取り出し、ドア上下についた青錆が浮いているシリンドー錠に差し込む。なんだか犯罪者じみて見えるのは自分のイスルギに対する偏見ゆえか。

ざい、とドアが開く音が夜のしじまに響き渡った。

ドアの隙間から見える内部は漆黒の闇である。

「どうぞ」

低い声音で促され、間宮は恐る恐る足を踏み入れた。

古い建物特有の埃と黴がまざったような臭気が立ち込めていた。できるだけ吸い込みたくなくて、自然と呼吸が浅くなる。

ふいに光が差しこみ、驚いて振り向くとイスルギが懐中電灯を向けていた。しかも自分だけちやっかりマスクをつけている。

「ライトは君が持たたまえ」

間宮は差し出された懐中電灯を受け取り、周囲を左右に照らした。

狭苦しいエントランスには段ボール箱が幾つも重ねられていた。封の開いた幾つかには、暗くてよくわからないが何かごちゃごちゃと詰め込まれている。段ボール箱の他にも、事務机やキャスター付きの椅子、ポットや食器までもが埃を被って無造作に積んであった。がらくたの山である。

奥の暗闇に光を向けると、がらんとしたフロアが広がっていた。物が積まれているのは入り口付近だけのようだった。

エントランスの左手を見ると、つきあたりにエレベーターのドアが見えた。イスルギに促され、そちらに向かう。

ところどころ蜘蛛の巣がかかり、埃が塊になってそこら中に蟠っている。光の当たった一瞬、壁に大きいひびがらしきものが映った。明るいもとで見ればひどい廃墟かもしれない。

エレベーター横の角を曲がったところに階段があった。イスルギはそこで足をとめた。

「これが件の十三階段だ。見ての通り今は十二段ずつ区切られているが」

——と言われても、真っ暗で何も見えやしない。

恐る恐る懐中電灯を差し向けると、ビルや学校などでよく見る、折り返しごとに踊り場のある階段だった。

間宮は息をのんだ。何の意識もしなければ普通の階段に見えていたのだろうが、何か起こると聞いてしまつてはやたら怖く思えてしまふ。

「私はここで待っているから。安心して上るといい」
低い声が背後から聞こえた。

「それと。大事なことだが——上りきるまで振り向いてはいけないよ」
では行きなさい、とイスルギは呟くように言った。

懐中電灯で丸く照らし出された足元以外は、周囲は完全な闇だった。

一段目に足を踏み出す。そのまま、一、一、と心の中で数えながら階段を上ってゆく。スニーカーが埃だか砂だかを踏むじやりじやりとした音だけがやたら大きく響いて聞こえた。

(人間が忽然と消えるなんて……本当にあり得るのだろうか)

ぞわぞわとした怖気が間宮の背筋を這うように込み上げてきた。

なんだかも、一気に駆け上がってしまおうかとも思ったが、それも怖い気がした。

靴先を明るく照らす懐中電灯の丸い光を見つめながら、慎重に足を進める。光の中に妙なものが入り込まないよう、見えてしまわないよう、足元の最小限しか照らせないのが情けなかった。イスルギの術中にはまつてるようでものすごく癢だったが、怖いものは怖いのだ。

などとごちゃごちゃ考えている間に、すでに足は十二段目を踏んでいた。

懐中電灯を差し向けると、目の前は折り返しの踊り場だった。

間宮は大きく息を吐く。たった十二歩階段を上っただけなのに、緊張で全身がひどく疲弊している。そしてまだ、一階の半分を消化したのみである。

(もしかして、予想していた以上に重労働なのでは……?)

だが、階段を上るだけで一万円である。イスルギの言うとおりこんなにおいしい仕事は他にないだろう。——何も起きなければ。

中四階の踊り場に差し掛かったところで間宮は一度立ちどまり、大きく息を吐いた。

日頃の運動不足がたたり、すでに足は疲労で重くなっていた。もうずいぶんと上った気がするが、最上階にはまだ着かないのだろうか。

そう言えば、このビルは何階建てなのだろう。階数を確認していないことに今さらながら気づいた。外観から中規模——五、六階くらい——のビルであろうことは予想がついた。であれば、この重労働もそろそろ終わりが近いはずだ。

疲れた足を励まして、間宮は再び階段を上りはじめた。

一、二、三、四——

単調に階段数をかぞえていると、頭がぼうつとしてくる。思えば、現在深夜なのだ。

しかも何も起きない。鼠一匹出ない。結局、ただ暗く埃っぽい階段を、延々と折り返し上り続けているだけである。

(……もしかして、その噂や失踪事件自体、イスルギさんの作り話なんじゃないのか?)

イスルギは恐怖の感情を蒐集できればいいと言っていた。

(つまり、ただ僕を怖がらせればいいんだ。そのために噂をでっち上げて、それらしい廃ビルで肝試しさせて……)

人間が消えるなんて——そんなこと、起こるわけがないのだ。

——十、十一、十二。

何回目の踊り場だろう。そう思いながら足を踏み出し、靴先が何かにつんと当たった。

驚いた拍子に、懐中電灯の光がわずかに跳ね上がる。そこで一瞬呼吸がとまった。

踊り場と思った次の段は、階段だったのだ。

(十三段目……?)

一気に目が覚めた。ぞわっと全身の毛が逆立ったようだった。

(数え間違えた……?)

そうだ。そうに違いない。

落ち着け、と浅く息を吐く。すぐ上に踊り場があるはずだ。

間宮はゆっくりと懐中電灯を上げ、先をライトで照らした。

そこに踊り場はなかった。階段が——ずっと先まで続いていた。

ぐらり、と足元が揺らいだ気がした。

(……失踪者は、もしかしてこの先を行ってしまった……?)

思ったとたん、恐怖が一気に突き上げた。どつと冷や汗が噴き出す。

——まずい。戻らなければ。

踵を返しかけた半身を、必死でこらえた。振り返ってはならない——イスルギの言葉を思い出したのだ。

(……振り返ったら、どうなるんだ?)

これ以上の何かが起こるといえるのか。

恐ろしい予感に、震えが込み上げる。

正面に顔を向けたまま、ゆっくり後ずさりして下りたらどうだろう。それはありなのか。

間宮はぐつと唇を噛む。いや——そういう問題じゃない。きつと、下りること自体がタブーなのだ。

「……イスルギさん」

請うように発した声は、ひどく掠れていたにもかかわらず異様によく響いた。ビル内の狭い階段のはずなのに、まるで広々としたがらんどろの空間に反響したみたいだった。

そしてイスルギの返事はない。

(後ろは、どうなっている……?)

足元の一点を凝視したまま、背中側に意識を凝らす。なんだか——後ろ全体がないよう、な寒々しさを感じる。

間宮は何度も生唾を飲み込むと、そうつと視線を上げた。

真つすぐ前に伸びた階段は無限を思わせた。光の届かぬ先は闇に閉ざされている。

元の世界からよけい離れてしまいそうで、とても前には進めなかった。

(……なら、後ろに戻るしかない)

歯を食いしばり震えをこらえ、思い切って振り返った。

背後は、塗りつぶしたように真っ暗だった。

取り返しがつかないことをしてしまった——正体不明の後悔が貫いた。それを振り切るように懐中電灯を階下に向け——。

絶望した。

終わりの見えないほどの段がずらりと続いていったのだ。前方と同じ、懐中電灯で遠くを照らしても先に光が届かないくらい、長い長い階段だった。

(踊り場はどこに……)

たった今、上ってきたのだ。確かに折り返し階段だったはずだ。

その時。かすかに何か聞こえた。

べたべたと、なんだか貼りつくような音だ。

耳を澄まさねば聞こえないほどだったが、耳鳴りすら聞こえない無音の中でそれはいやに耳に付いた。階段のずいぶん下のほうから、しかもだんだん大きくはつきりと——近づいてきている。

(……足音?)

何者かが裸足で階段を上ってくる、そんなイメージが浮かんだ。

少なくともこの足音がイスルギのものでないのは確かだ。彼は革靴だったのだから。

(じゃあ、いったい何が……)

よくないものが近づいてくる、そう直感が訴えていた。逃げろ逃げろと本能が急かす。

だが逃げるとなれば——上にのぼるしかない。

この場から離れるのは嫌だった。より取り返しのつかない事態になりかねない。だが、躊躇ちゆうちゆうしている間にも足音はどんどん近づいてくる。

どうしようもなくて立ちすくんでいると——足音だけでなく、声らしきものも聞こえはじめた。

複数の人の声だ。

それは、もしや助けが来たのかと一瞬でも喜べるたぐいのものではなかった。低く唸るような声の集合。耳を覆いたくなるような禍々まがまがしい不協和音だった。

ぞつとした。しかも声は複数人のものなのに、足音は一人分なのはどういうことなのだ。

恐ろしいものが近づいてくる予感に、震えがとまらなかつた。心臓が早鐘はやかねを打つ。呼吸が切迫する。——なのに足は張り付いたように動かない。

やがて懐中電灯の光が届くか届かないかの奥の闇に、なにやら白っぽいものが見えた。

最初は裸の人間と思った。それだけでも発狂しかねないのに——近づくにつれ、それが人の形をしていながら決して人間ではないものだとかわかつた。禿頭とくとうを俯せ、奇妙に不均衡ふきんぱうな四肢ししをてんではばらばらに動かしながら四つん這はいで階段を這いあがってくる。関節もありえない方向に曲がっていた。

あまりの非現実的な光景に、一瞬、頭の中が真っ白になった。

「う——うわああ!!」

間宮は弾かれるように階段を駆け上がった。
（何だ、何だあれは——）

どれだけの段数を上っただろうか。

肺が熱く、横腹は鈍く痛み——やがて足がとまってしまった。

手摺にしがみつき、ぜいぜいと息を切らす。太腿がはちきれそうだった。

そつと階下に目を馳せる。階段のずいぶん下のほうに、闇に浮き立つような白い塊が見えた。

首が折れたかのように垂れた頭が、振り子のようにぐらんぐらんと揺れている。——あれの顔を

見たら終わる。ほとんど反射的に思った。何がどう終わるのかなんてわからないし想像すらしたくないが、自分の中の本能が叩きつけるように警鐘を鳴らしていた。絶対に見てはならない。

化け物はそれほど速くはないが一定のスピードで階段を上っていた。距離は確実に詰まってゆく。ぼやぼやしていると追いつかれてしまうだろう。

追いつかれたら——どうなるのだ。

「……う……っ」

恐ろしさに涙が滲んだ。

泣いている場合じゃない。上らなければ。階段を——。

懐中電灯を前に向けようとした一瞬、光の軌跡が化け物を横切った。

その姿に、戦慄した。頭と四肢を除いた胴体全体には、黒い虫——蛭のような——がうごうごと

這っていたのだ。

間宮は渾身の速さで前を向く。

意識的に視界に入れないようにしていたのに。思いのほか近づかれていて、見えてしまったのだ。

（……ちよつと待て。本当に、虫だった……？）

ぞわぞわとした悪寒が背筋を這い上ってくる。

——確認しては駄目だ。

後悔するとわかっていながらも、ゆっくりと振り返った。震える手で懐中電灯を差し向ける。

虫と思ったそれは、大小無数の顔だった。それらがあうあうと口を開閉するたびに、落ち窪んだ

眼窩や鼻孔、ぼつかりと開いた口腔が伸縮し、蛭がうごうごと蠢いているように見えたのだ。この

世のものとも思えないおぞましさだった。

行方不明者の顔だ——間宮は解ってしまった。彼らはここにいたのだ。

白目を剥いて口をだらしなく開けているものがほとんどだったが、中には苦しげに顔を歪めているものもあった。彼らに正気はあるのだろうか。もしそうであったなら、それは死よりも恐ろしいことなのではないだろうか。

（……捕まったら、僕もこれの一部に……？）

気が触れてしまいそうな恐怖が込み上げた。冷たい汗がこめかみを伝ってゆく。

その間にも、化け物との距離は着実に詰められていった。あと、ほんの十メートルほど先にまで迫っている。

逃げなければ。なのに足はぐくぐくと震えて動かなかった。恐怖のためか、疲労のせいか——。

その時だった。顔がいつせいに、かっところちを見た。気づかれた——すうつと血の気が引く。

「あああああ!!」

顔がいつべんに叫び出し、間宮は息がとまるほどに驚いた。

「助けて!」

「嫌だ嫌だ苦しい」

「痛い痛い痛い痛い」「あああ」

その顔は怯えて歪み、目から血の涙が流れ出した。化け物の全身から血が流れているように見えた。一気に戦慄した。助けを求める声を振り切るように、一心不乱に階段を駆け上がる。

元の場所からほとんど離れてゆく。まずいと思った。だが、逃げる以外にどうすればいいのだ。

嘔吐感が込み上げ、呼吸の合間に何度も唾をのみこむ。息がうまく吸えず、ものすごく苦しかった。足が止まり、なんとか進みを繰り返しているうちに、化け物との距離は徐々に縮まってゆく。

早く早く。追いつかれてしまう——。ひたすら焦るいっぽうで、あまりの非現実感に頭がふわふわとして、全身が思うように動かない。まるで水の中を歩いているようだ。

諦めてしまえば楽になる。そんな思いが脳裏をよぎり、すぐに叩きつけるようにそれを否定した。——楽になどならない。待っているのは永劫の苦しみだ。

その時、足首をつかまれて引き倒された。

階段の角に全身を打ちつけ、激痛に頭の中が真っ白になる。

化け物の手が縋るように伸び、足や服をつかんでいった。間宮は振り払おうともがき、気づいた体から生えている四肢は、四本全部が腕だったのだ。マニキュアの剥がれかけた華奢な腕、筋張った筋肉質の腕、骨と皮ばかりの老人の腕、ひときわ短い子供の腕——。不均衡に見えたのは、それぞれ違う人間のものだったからだ。

それらの腕をばらばらと蠹かし、化け物は間宮の体をよじ登りはじめた。生白い禿頭が眼前に迫り、とっさに右手で押し返す。そのぬるりと冷たい感触に怖気立ちながらも、反対の手ではシャツをつかむマニキュアの腕を必死に引き剥がした。老人の腕、子供の腕と外していったが、男の腕だけはどうしても外せない。

右手で化け物の頭部を押さえ、左手で男の腕をつかんでいる状態で均衡状態となった。少しでも力を緩めれば押し切られてしまう。

歯を食いしばって耐えていると、耳に無数の声がなだれ込んできた。

言葉にならぬ怨嗟。ぶつぶつと意味をなしていない細い呟き。唸り声、呻き声、すすり泣き——。

まるで耳に漏斗を突き刺し、声を直接脳にどろどろと流し込まれているようだ。耐えられない。ものすごく叫びたくなった。だがそれをした瞬間、きつと発狂してしまう。

必死でこらえながら、間宮は化け物に目を馳せた。ぎゅちりと寄せ集まった顔の奥に、さらに顔が覗いていた。隙間から血走った目を剥き、「うー! うー!」と唸りながらこっちに助けを求めている。

本当に何人も人間が詰め込まれているのだ。化け物の大きさは自分より一回り小さいくらいなのに。物理空間などこの狂った世界の中では意味がないのであろう。

その時。ふいに下腹に鋭い痛みを感じた。視線を下げると、いくつもの顔が逃がすかとばかりに恐ろしい形相で服に食らいついていた。そのうちのひとつが肌を噛んだのだ。

とっさに男の腕から手を離し、その顔を拳で叩いた。鼻血が噴きこぼれ、顔は力なく呻いて泣き出した。

血の涙がシャツを赤くにじませてゆくさまに、思わず見入った。誰かの顔面を殴るなど、普通に生きていれば一生無縁であろう暴力だ。鼻骨の碎ける生々しい感触が手に残っている。——自分の中で、何かがぶつりと切れるのを感じた。

間宮は片手で化け物の頭を押し返しながら、もう一方の手で男の指を順にへし折っていった。やつと男の腕を引き剥がすと、服を噛む顔を片端から殴ってゆく。スニーカーで足掻くように化け物の腹を蹴る。顔たちの皮膚がずると剥け、それらは「ああああ」と耳を塞ぎたくなるような声を上げた。

もう無我夢中だった。なかば正気を失っていたのかもしれない。

そんな中、イスルギの台詞が脳裏をよぎった。

——ご両親は他界されているそうだね。

イスルギは、消えても捜す人のいない、悲しむ者もいない、あとくされのない人間が欲しかったのだ。

三ツ橋はこんな目に遭わされるアルバイトだと知っていたのだろうか。

詳細は知らなくとも、ろくな仕事でないのはわかっていたはずだ。だからこそたくさん友人の中からでなく親しくもない自分を紹介したのでだろう。

悔しさのあまり涙が滲んだ。この感情も記録されているのだろう。そして誰かの道楽やストレス解消に使われるのだ。

そう思ったとたん、かっと怒りが込み上げた。目の前の恐怖が霞むほどに悔しかった。

腕に巻いた測定装置に目を馳せる。

(こんなもの外してやる)

手首を口元を持ってゆき、ベルトを噛んで引っぱった。

そこでふと、気付いた。

(……僕がこの化け物に捕まったら、イスルギさんはこの時計をどうやって回収するつもりだ?)
行方不明になるということは、死体すら戻らないのだろうか。ならばこの測定装置ごと消えてしま
うのではないだろうか。

ではどうやってイスルギはこの経験を回収するつもりなのか。

(もしかして、リアルタイムで情報を外部に送っているのか? なら、この場で助けを求めれば、
外部に届く……?)

その時。化け物の頭部を押さえていた間宮の手を、マニキュアの手が振り払った。

しまった——間宮が思わず視線を向けた瞬間、化け物もまた顔を上げた。

目も鼻もないつるりとした顔に、耳まで大きく裂けた口がひとつ――。

「うわあああ!!」

恐怖が突き抜けた。

「イスルギさん!! もう終わりにします!! お金なんていらなから助けてください!! 聞こえてるんでしょう!？」

測定装置は何の反応もなかった。

情報の送信は一方通行で、向こうからは返信できないのかもしれない。そもそもイスルギに声が届いている確証などない。

だが間宮は、一縷の望みにかけて叫んだ。

「これ、道連れにしますよ!!」

化け物がずいっと顔を近づけてきた。

恐怖が突き上げ、身をよじって階段を這い上がろうとしたところを、幼い手につかまれた。四本の腕がわらわらと体にかかってゆき、押さえつけられる。

間宮はなされるがまま、はっはっと思を喘がせた。

見下ろす化け物の裂けた口が湾曲する。笑ったのだ。

顔たちの声も、いつの間にか笑い声に変わっていた。

終わりだ――そう思った瞬間、測定装置の沈黙が揺らいだ。

『……これとはなんだ？ 何を持っている？』

イスルギのくぐもった声だった。

間宮は息をのみこんだ。全身の毛が逆立ったようだった。

「……髪の毛ですよ」

がちがちと震える歯を食いしばりながら、やっと言う。

絶句したような沈黙があった。

『どうして私の髪など持っている？ いつ入手した？ 事務所ですか？』

イスルギの狼狽した声が響いた。だが間宮はそれに答えなかった。答えられなかったと言っている。もう、化け物は目の前だった。

ふいに手が無理やり開かれる感覚がした。イスルギが何らかの方法でこじ開けようとしているのだ。

イスルギの焦りが伝わり、こんな状況であるのに笑い出したくなった。

（絶対に渡すものか）

髪の一筋を渾身の力で拳の中に握りこむ。

化け物の顔が覆い被さってきた。それを振り払いたい衝動を懸命にこらえ、間宮は両手を腹に抱え込むように蹲った。

ぱくっと開けた大口の中は、尖った乱杭歯がびっしりと敷きつめられていた。

恐怖のあまり――急速に意識が遠のいてゆく。意識が暗転する瞬間、イスルギの舌打ちが聞こえた気がした。

目覚めると、そこはイスルギの事務所だった。

黒革のソファアーに仰向けに寝かされた状態で、間宮は浅い息を吐いた。

(……戻れたのか?)

体から汗と埃でひどいにおいがする。疲労で全身が軋むようだった。

向かいのソファアーにはイスルギが掛けていた。腕と足を組み、不機嫌そうな面持ちでこつちをじつと見据えている。

「……どうやって僕を助け出したんですか……」

「何を言ってるんだ。君はずっとあの場にいたよ。私はただ、呆けたように踊り場に座り込んでしまった君を、十二段目に引き下ろしただけだ」

イスルギはふんと鼻を鳴らし、眉間の皺をさらに深くした。

「アレが君に何をするのか、君がどんなふうにも神隠しに遭うのかまで記録しなかったのに」

そう悔しげに言うさまに、間宮は怒りを通り越して呆れかえった。——本人の前で言うことか。そもそも怒る気力はまったく残っていないかった。安堵と疲労の入り混じった溜息を吐く。

それよりだ、とイスルギは真つ黒な双眸で見下ろしてきた。

「君は肝が据わっているな。普通ならパニックになって泣き叫ぶか、気が狂うところだ。そういう劇的な演出を伴う恐怖体験が喜ばれるというのに——君はそうでないどころか、あんな状態で私を脅すとは」

イスルギはぐつと悔しげに唇を引きむすぶ。

「……まさか体の一部を質に取られるとはな。私の髪などいつの間に入手した？ 髪や爪といった人体の一部は本人の形代になる。そうでなくても道ができる。その道を伝って悪いものが本体のところに来るんだ。だから奪われることのないよう、事務所はチリひとつ残さず掃除はしてあったはずだ」

ああこれ、と間宮はかたく握りこんだ拳を開いた。汗でぬれた掌に一本の頭髮が張り付いている。それを反対の手でつまみ上げた。

「入手も何も……これは僕のです」

イスルギはぼかんとする。そのらしくない表情に、間宮はかすかに笑った。

「これがあなたの髪だなんて、僕、一言でも言いました？」

ただの階段じゃないんですか——そう問うた自分に、イスルギは「誰がそんなことを言った？」と返した。その意趣返しのもりで言っただけだ。

イスルギはぐつと怒りに顔を歪ませた。立ち上がってガラステーブルを回り込み、胸倉をつかみあげた。

殴られる——間宮はとっさにかたく目を瞑る。

だが、痛みは来なかった。かわりにシャツの胸ポケットに二つ折りにした封筒をぐいっとねじ込まれた。

封筒の厚みに、間宮はぎよっと顔を強張らせた。イスルギは額に青筋を立てたまま、「取っておきたまえ」と言い捨てる。

「ちよっとこんなには……！」

受け取れませんかと言う間宮を、イスルギは睥睨した。口の端を歪ませて笑う。

「君は面白いな。すごく気に入った。——またお願いするからよろしく頼むよ」

間宮は目を見開いた。

「い、嫌です」

その言葉を無視し、イスルギは肩を怒らせながら奥の部屋に引っ込んでしまった。

(……とんでもない人と関わってしまった)

白黒の部屋に一人残された間宮は、呆然とするほかはなかった。

第二話 忌み地

1

知らない番号から電話がきて、不審に思いながらも出てみると三ツ橋だった。

足を踏み入れたばかりの大学購買の店舗からわざわざ外に引き返し、スマートフォンの通話をタップしたことを間宮はたちまち後悔する。

「イスルギさんからバイトの募集が来てさあ。間宮にも声かけろって言われて」

その悪びれない口調に、間宮は開いた口が塞がらなかった。

(前回、僕をあんなひどい目に遭わせておきながら……)

アルバイトの内容、彼は知らなかったのだろうか。

そしてなぜ自分の電話番号を知っているのか。教えた記憶はない。

三ツ橋は日時と場所を告げると、「詳細はイスルギさんに聞いて」と一方的に通話を切ってしまった。まだ、そのアルバイトを請けるとも言っていないのに。

土曜日の午後一時。時間びったり集合場所の大学前に着くと、六人乗りの黒のミニバンが校門近くに停まっていた。

助手席に乗ったイスルギが、フロントガラス越しに手を上げた。明るく晴れた野外で見ると顔色の悪さがよけい目立ち、なんだか彼のまわりだけが陰鬱いんうつとして見えた。

間宮はうつむきがちに会釈を返し、スライドドアのボタンを押す。

「あれっ、間宮じゃん」

後部座席の奥から顔を覗かせた男に、間宮は虚をつかれて見上げた。

(中野の)

同じ学部なかがのの男だった。ただ、話したことはない。

なんだか気まずく思いながらも車内に乗り込む。三列目シートが荷物で埋まっていたので、しぶしぶ中野の隣に座った。

「懲こらりずに参加してくれて嬉しいよ」

助手席のイスルギが半身を傾けるようにして目を馳せてきた。間宮はそれをむっと見返す。そこ

で運転席の男に目がとまり、あれっと思った。

前回のアルバイトで迎えに来てくれたタクシーの運転手じゃないだろうか。野球帽を目深まぶかに被って顔は見えないが、首の真後ろのほころの位置がまったく同じだったのだ。

専属の運転手なのだろうか——そんなことを考えているうちに、車は動き出した。

「間宮もさあ、三ツ橋くんさんにバイト紹介されたの？」

頷く間宮を、中野は「へえー」と心底意外そうに見つめた。

「俺、間宮が三ツ橋くんさんと仲良かったなんて知らなかったわ」

だろうね、と間宮は心中で呟く。実際、三ツ橋と仲良くなどないのである。

「何で誘われたの？ 大学で話してんの一度も見たことないけど。なんかきつかけでもあったの？」
妙に食いついてくる中野に、間宮は閉口する。

「……別にないよ。向こうが話しかけてきたんだよ」

「何で君に？」

——それはこつちが聞きたい。

「だってさあー、あの三ツ橋くんさんだよ？ あれだけ人脈広くて、芸人のパーティーに呼ばれたとかモデルと腕を組んで歩いてたとかヤクザと談笑してたとか噂の絶えない彼がさ。……なんで君なんだよ」

中野の口調に嫉妬しとの色が見え、間宮はたちまちうんざりしてしまった。

理由があるとすれば、自分が三ツ橋にとってまったくどうでもいい人間で、どうなってもかまわ

ないと思われていることに他ならないのだが。

「いや、俺なんかさ。三ツ橋くん（じま）に直々に声かけられてさあ。そりゃ二つ返事で了解したよな」

中野は三ツ橋がつるんでいる連中の一人だった。もしかして、友人というより取り巻きといった立ち位置なのかもしれない。

そもそも本当に仲のいい友達なら、イスルギのアルバイトなど紹介しないだろう。むしろこの中野も、自分と同じようにどうなってもかまわない人間と思われるに違いなく、間宮は少しだけ同情してしまった。

「まあ仲の良し悪しなんて主観的なものだからねえ」

イスルギが口を挟んだ。言外に、仲がいいと思っっているのは中野の一方的な思い込みだと言っているようなものである。

やはりイスルギは性格が悪い。中野とは初対面だろうに。この男は誰に対してもこんなふうなのだろうか。

だが中野はイスルギの悪意に気付いたようすもなく、三ツ橋とのまったくどうでもいいエピソードを滔々と話しはじめた。間宮が脳内で別のことを考えながらそれを聞き流していると、中野は唐突に真顔になり、「で、何で誘われたの？」と話を戻す。

やたら四角い顔をぐいっと近づけられ、間宮は若干距離を取った。その目が真剣で怖かったのだ。「知らないよ。今回だって、一方的に電話よこしてきて……」

「電話？ 三ツ橋くんの方から？」

そうだよ、と間宮は吐き捨てた。電話口の三ツ橋の自分勝手を思い出し、むかむかと苛立ちが込み上げたのだ。

中野はぼかんと目を見開いていたが、すぐにまなこを吊り上げた。

「なんで君みたいなの……えっと」

「――底辺学生が？」

「そう底へ……なんて言っただろ！ いやそうじゃなくて、三ツ橋くんみたいなタイプとは、ほら、会話も気も合わないようなのに……！」

思わず本音を漏らしかけた中野はしどろもどろになる。

「あんなおかしな柄シャツ着たやつのがいいんだよ」

間宮が言い返すと、中野は目を丸くした。

「おかしいなって、ヴィラートへイヴンは超有名な高級ブランドだからな？」

「高級ブランドなんて僕みたいな底辺が知るわけないだろ」

「底辺とか関係あるか！ めちゃくちゃ流行ってんのに。今時、小学生だって知ってるブランドだぞ？」

「来年には誰も着てないと思うけどね」

ヴィラートへイヴンすら知らない奴が三ツ橋くんから直接電話もらえるなんて――中野は悔しげに呟くと、眉根を寄せてくつと唇を噛みしめた。いちいち大袈裟おおげさである。

それにしても、中野の三ツ橋への心酔っぷりは並々ならぬものがあり、正直引いてしまうほどだっ

た。三ツ橋が彼をイスルギに紹介した理由はこのうつつとうしさのせいではないだろうか。

「中野くん。間宮くんが、君の三ツ橋くんへの想いが重くて気持ち悪いなあって顔をしてるよ」
してません、と間宮はすかさずイスルギを睨んだ。急に巻き込まないでほしい。

「俺は気持ち悪くなんかいいですよ！」

中野がイスルギに訴えた。

「いや私が思ったわけじゃなくて、間宮くんがそう思ってそうだなあって」

「だから思っていないですって」

実のところ思っていたわけだが、勝手に人の気持ちを代弁しないでほしい。

「……間宮って意外とはつきりもの言うのな。もっと大人しいタイプだと思ってたわ」

中野は不機嫌そうに口を尖らせた。

「それはそうと、アルバイトは君たちの他にあと二人いるんだ。明央女子大学の学生だ」

イスルギが言った。

「女の子っすか！」

中野は途端に浮かれた声を上げる。共感を求めるようにぱっと間宮を見やり、その表情一つ変えないさまにすぐに呆れたような顔になった。

「間宮ってさあー。なんか、変わってんだなあ」

「変わってなんかいいよ」

眉をひそめた間宮を、中野はなんだか興味深そうに見つめたのだった。

住宅地を抜けると、車窓から見える風景は緑が多くなっていった。

やがてビニールハウスの並ぶ畑が見えてきて、それも通り過ぎると、ミニバンは山に向かって進んでいった。

草茫々の砂利道に入り、しばし走ったところでようやく車はとまった。

傾きかけた掘っ立て小屋の前に黒のワンボックスカーが停まっていた。そのすぐ近くに立った女の子二人に、間宮は目を馳せる。

彼女らが明央女子大のアルバイトなのだろう。なんだか対照的な二人だった。

一人は髪を明るい栗色に染め、服も派手——というか華やかだった。レトロな小花柄のワンピースにデニムジャケット、足元は真っ赤なローヒールパンプス。鬱蒼とした周囲の風景からものすごく浮いている。

もう一人は対照的に陰気な雰囲気醸し出していった。顎下でばつさりと切り揃えた真っ黒なおかつぱに、重たげな前髪が眼鏡の上半分を隠している。服装はグレーのパーカーにベージュのコットンパンツ、スニーカーという実用重視の格好だった。隣に立つ派手な女子と並ぶと野暮ったさが際立った。——Tシャツにジーンズ姿の自分に言われたくはないだろうが。

「国生瑠奈です」

ミニバンを降りた間宮と中野に、派手なほうの女子が愛想よく声をかけた。にこっと笑いながらゆるく巻いた髪を揺らし、「はじめましてえ」と舌つたらずな口調で言う。

——眩しい。間宮はそっと目をそらす。今までの人生の中であまりに縁遠いタイプの女子だった。一方で中野は、「瑠奈ちゃんかあ」とだらしなく顔を弛緩しかんさせている。

中野と間宮も自己紹介をし、最後に眼鏡の女子が「目下部茜くさかべあかねです」と伏し目がちにぼつりと名乗った。

「この子、愛想悪くてごめんねえ」

瑠奈が小首を傾げて両手を合わせてみせた。仕草のいちいちが可愛らしく、間宮はなんだか感心してしまった。自分が相手にどう見えるかよくわかっているのだ。実際、中野は鼻の下を伸ばしっぱなしである。

一方で、茜は下を向いたままだった。

「自己紹介は済んだかな」

イスルギは四人の大学生を興味深そうに眺めながら言った。

「では仕事内容の説明をしようか。今から君たちにやってもらうのは肝試かんしいだ」

中野はぽかんとする。

女子二人は特に動じた様子もなく、イスルギの話を聞いていた。事前に内容を聞かされていたようだった。

「この道を行った先にもう使われていない古い別荘がある。肝試かんししと言うくらいだから予想がつくと思うが、そこは心霊スポットだ。その別荘に入り、散策して戻ってくる。以上が君たちの仕事だ」

「……それだけですか？」

中野が呆気にとられたように尋ねた。

「ああそうだ。ただ条件があつて——これをつけてもらう」

出たよ——イスルギがジャケットの内ポケットから取り出した測定装置に、間宮はたちまち警戒する。

「まあ、スマートウォッチのようなものだ。君たちの位置情報を正確に記録する。だからごまかしはきかないよ。しっかりやってくれたまえ」

記録するのは位置情報だけじゃないだろう——間宮はイスルギを見据えた。

イスルギはチラと間宮を見返すと、薄く笑った。

「——では行きなさい」

「都内からそう離れてない場所にこんな山深いところがあるなんてね」

鬱蒼とした山道を進みながら、中野が隣を歩く瑠奈に笑いかけた。

山というが、道筋のしっかりとついた平坦な道だった。森林公園のハイキングコースのほうが高低があるくらいである。そこを女子と散歩しているようなもので、中野はこの仕事を楽しいイベントぐらいにしか思っていないようだった。

間宮自身も、初夏のさわやかな森の空気感につい悠長な気分になっていた。季節は六月に入ったばかりだった。まだ梅雨つゆの気配すらない。

「日本の国土は三分の二が森林だもの。どこに向かったって山に突き当たるものよ」